

短歌（十四）

下田 明美

レモンの実、毎日眺めていたのだが

採らねばならない花が咲き出す

海棠の、ピンクの花たち眺めれば

玄宗ゆめこいずとも私は夢子

チリチリに焼けてしまった牡丹から

花芽が九個、五月には咲く

あまりにも見事に咲いた牡丹かな

手を差し出せば揺れる花びら

長谷川のルーツは奈良の初瀬川

万葉にもある長い谷川

朝まだき悪夢の扉こじ開けて

日常の方なりわいへ生活の中へ

春菊のばかり食はもう終わり

畑を彩る黄色い花たち

どうしたら長生きできるか考える

逝き着く先は決まっているのに

見え見えのエサで釣られる人が居る

ホントに釣られて居るのかしら？

官僚の書いた原稿読むだけが

答弁ではない、時々間違う

北京から中原の地を十日あまり

とおか

青空が無い、漂うスモッグ

一〇八段登れば煩惱落とせると

思っていないが、お寺を見に行く

突風につかまる物を探してる

ドア・ノブ無いか、手すりでもいい

一昼夜、雨降り続けた坂道は

流速二メートルもの水が流れる

一段と雨風強く外見ええず

土砂災害の警報聞こえる

離山峡小さな川の上流に

蛍いるらし消えては光る

